

聖書箇所 ヨハネによる福音書20章1節～3節、11節～18節

- 1 : さて週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。
- 2 : それで、走って、シモン・ペテロと、イエスが愛された、もう一人の弟子のところに来て、言った。「だれかが主を取って行きました。主をどこに置いたのか、私達にはわかりません。」
- 3 : そこでペテロともう一人の弟子は外に出て来て、墓の方へ行った。
  
- 11 : しかし、マリヤは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞきこんだ。
- 12 : するとふたりの御使いが、イエスのからだが置かれていた場所に、ひとりは頭のところに、ひとりは足のところに、白い衣をまもってすわっているのが見えた。
- 13 : 彼らは彼女に言った。「なぜ泣いているのですか。」彼女は言った。「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」
- 14 : 彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。
- 15 : イエスは彼女に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は園の管理人だと思って言った。「あなたが、あの方を運んだのでしたら、どこに置いたのか言ってください。そうすれば私が引き取ります。」
- 16 : イエスは彼女に言われた「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で「ラボニ(すなわち、先生)」とイエスに言った。
- 17 : イエスは彼女に言われた。「私にすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。」
- 18 : マグダラのマリヤは、行って、「わたしは主にお目にかかりました。」と言い、また、主が彼女にこれらのことを話されたことと弟子たちに告げた。

メッセージ骨子：

<序論> 30年前、三浦友和が山口百恵にプロポーズし人生を真剣に語り始めたとき、自分は全く新しい方向に走り出したと「相性」と言う本の中で彼は語っています。出会いは人生を変えます。しかし表面的なものでは何も起こりません。復活の主とリアルにお出合いした時、マグダラのマリヤの人生も変わりました。彼女の身にいったい何が起こったのでしょうか。そしてその出来事と私達との関係は？

<ポイント1> 復活の主にお出合いするとき、主は『あなたの名を呼んでくださる』  
名前が人格であり、人そのものです。イエス様の死を嘆き悲しむマリヤの背中に向かって、イエス様は「マリヤ」と万感の思いを込めて、その名を呼ばれました。主は、あなたが生まれる前からあなたの名を呼び、あなたを形作って下さった。だから人は自分の名前を呼ばれるとき、本来あるべき自分に戻ることができるのです。

<ポイント2> 復活の主にお出合いするとき、主は『混乱の霊から救ってくださる』  
人は弱さと強さ、理性と感情、いろいろな矛盾を併せ持つ、本来バラバラな存在です。復活の主は、この混乱の霊から私達を救います。そしてそのことによって我々は、主の召されるベクトルに向かって、ブレなく立ち上がる者と変えて頂けるのです。

<ポイント3> 復活の主にお出合いするとき、主は『いのちと使命を与えて下さる』  
存在の根源と宣言された神が、モーセに出エジプトの使命を与えられました。マリヤも主の復活を兄弟たちに告げ知らせる仕事を復活のイエス様から仰せつかりました。私達も主にお出合いするとき、自分にしかできない確たる使命を与えられます。

<まとめ> だれでも過去に負った傷を持ったまま今を生きていますが、復活の主はその古傷こそ秘密兵器だと言われます。弱さが主に在って強さに変えられる。これが復活の奥義であり、人生経営の肝なのです。